

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：34301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720019

研究課題名(和文) プラトンの中期イデア論の生成

研究課題名(英文) Study on Socratic Background of Plato's Theory of Ideas

研究代表者

西尾 浩二 (Nishio, Koji)

大谷大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：20510225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主要な成果として二点を挙げる。(1) プラトンの前期対話篇のひとつ『エウテュプロン』の新しい翻訳と注解の作成。底本には最新の校訂版(オックスフォード古典叢書中のプラトン全集第一巻デューク版)を用い、諸訳と新旧の注釈書も検討した。(2) ソクラテスの哲学的探求における「定義の優先性」をめぐる論争の整理と解明。イデア論の生成を視野に入れることで、彼の哲学的探求の有効性を示した。(1)(2)ともに最新の研究に基づく成果であり、今後の研究の基盤となる。

研究成果の概要(英文)：I present two results of this study. (1) New translation and commentary of Plato's Euthyphro, one of his early dialogues. This translation is textually based on the Duke's new critical edition of Platonis Opera I (Oxford Classical Text). In making my translation and commentary, I surveyed many preceding translations and commentaries. (2) Survey and elucidation of the problem about priority of definition in Socratic philosophical investigation. I showed effectiveness of Socratic philosophical investigation by introducing the theory of ideas into this problem. Both of these results are based on recent study, and will become the base of future study.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：ソクラテス プラトン エウテュプロン イデア論 対話

1. 研究開始当初の背景

二つの学術的背景を記す。

(1) 第一に、本研究の着想に至った経緯である。研究代表者はそれまで、『国家』などプラトンの中期対話篇で展開される教育思想、すなわち「教育とは《善》への魂の向け変えである」(『国家』518D)という考えを中核とする中期プラトンの教育思想の背景にいったい何があるのかを解明するため、その理論的背景のひとつと考えられる魂の三区説の研究に取り組んできた。その点では一定の研究成果を達成し、研究開始当初は、それと並ぶもうひとつの理論的背景である中期イデア論の研究にとりかかっている段階であった。しかし研究を進めるうちに、教育思想の背景として中期イデア論を解明するには、前期対話篇でソクラテスが問う「何であるか」の問いにまでどうしてもさかのぼって考察する必要がある、と考えるに至った。なぜなら「教育とは《善》への魂の向け変えである」というときの《善》とは、いわゆる「善のイデア」だが、プラトンはこれを、一方では「存在と認識を超越するもの」であり、他方では「善いとは何であるか」という基本的理解のもとに語っていると思われるからである。したがって、比喻でしか語れない超越として考察するのではなく、むしろソクラテスの「何であるか」の問いにまでさかのぼって考察を加えることが、中期イデア論解明の突破口となり、さらには中期プラトンの教育思想に従来の研究とは別の角度から新たな光を当て可能性を探りだすことにもつながるのではないかと。これが、本研究の着想に至った経緯である。

(2) 第二に、本研究は、国内外の研究動向に照らして、現在のところ手薄となっている研究上の空白を埋めるものである。「何であるか」の問いがイデア論成立の前提ないし基盤であることは、たしかにこれまでもすでに指摘されてきた。たとえば藤沢は「中期対話篇では、そこ〔Xとは何であるか〕という問い〕で問われていた「相」そのものの存在論的・認識論的なステータス(身分、資格)に論述の重点が置かれるようになる。そしてそのことがとりもなおさず、イデア論の成立を意味する」と指摘する(藤沢令夫『プラトンの哲学』岩波新書 1998: pp.83-84)。しかしながら、こうした指摘に沿った具体的研究は、私見では現在のところ少数であり、十分には展開されていない(近年では、国内では小池澄夫「イデアについて 序説」古代哲学研究 36, 2004: pp. 1-16 海外では Dancy, R. M. (2004) *Plato's Introduction of Forms*, Cambridge University Press などがある程度である)。本研究は、このように手薄になっている研究上の空白を埋めることで研究の進展に貢献することをめざすものとして構想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古代ギリシアの哲学者プラトンが中期対話篇(『国家』など)で提示する形而上学的理論である「中期イデア論」に関して、彼の前期対話篇(『エウテュプロン』『ソクラテスの弁明』『メノン』など)にまで遡り、その生成の背景を明らかにすることである。具体的な目的として次の3点が設定された。

(1) プラトンの前期対話篇にみられるソクラテスの「何であるか」の問い(「勇気とは何であるか」など一般に「定義の探求」とみなされている問い)から中期イデア論が生成するには、どのような背景があるのかを明らかにすること。

(2) この(1)の解明過程で、前期対話篇のうち「敬虔とは何であるか」を主題とする『エウテュプロン』にとくに焦点を当て、探求における定義の優先性の問題や、イデア論とのつながりをはじめとしてさまざまな論点から、この対話篇を総合的に研究し、解説・注釈付き翻訳を作成し公刊すること。

(3) これら(1)(2)を踏まえた発展的研究として、中期イデア論を捉えなおし、それによって中期プラトンの教育思想へ新たな光を当てること。

3. 研究の方法

研究の方法として、上記3点の研究目的のうちで最も基礎的である(2)を主たるターゲットに研究を進めることとした。それによって、より一般的な問題である(1)についても何らかの示唆が得られるだろうと予想したからである。

さらにまた、それと関連することだが、効果的に研究を進める上でのアイディアとして、本研究では前期対話篇のうちで(『ラケス』や『メノン』なども参照しつつ)『エウテュプロン』をもっとも重視し考察のひとつの軸に据えた。その理由は二つある。ひとつは、『エウテュプロン』に含まれる内容や用語が明らかに中期イデア論へ発展する方向性を示しているからである。そこでの探求対象は、「すべての敬虔なことがらによって敬虔であるところのエイドスそのもの」(6D)、「あらゆる行為においてそれ自身と同一」で不敬虔とは正反対であるような単一の相(イデア)(5D)、「それに注目し、それを規準(パラダイグマ)として用いることによって」敬虔なものを敬虔であると判別しうような判別規準(6E)、などと記述される。こうした記述を手がかりに考察を進めることが、中期イデア論の生成の背景や要因を分析する上でもっとも効果的かつ効率的なアプローチであると判断した。

前期対話篇のうちで『エウテュプロン』をもっとも重視するもうひとつの理由は、この対話篇に関する論考でギーチ(Geach, P. T.

1966, "Plato's Euthyphro: An Analysis and Commentary", *Monist* 50. 3: 369-82)が一石を投じたことから生じた「定義の優先性」をめぐる論争である。この論争は、ソクラテスが「何であるか」の探求を行うさい、次のような二つの誤った想定(「ソクラテス的誤謬(Socratic fallacy)」)をしているのではないか、というギーチの問題提起に端を発する。すなわち、「(想定 A) もしある言葉 T を適切に述語づけているとあなたが知っているならば、あなたは、『T であることがどういうことであるかを知っている』(あるものが T であるための一般的基準を与えることができるという意味で)のでなければならぬ」(想定 B) T であるものの事例を出すことで T の意味に到達しようとしても無駄である」の二つである(想定 B は想定 A から導かれる)。もしこの二つの想定をソクラテスがしているなら、彼はたとえば、固有名が文の中の単語であることを、「単語」の「厳格な意味」が示されない限り認めようとしないう(ギーチの挙げる例)が、それは誤りである、とギーチはいう。なぜなら、「知識を表明するとき用いている言葉を定義できなくてもわれわれはたくさんの事柄を知っている」であり、形式的な定義は言葉を明らかにする方法のひとつに過ぎず、むしろある場合には一群の事例のほうが形式的な定義よりも有効であるかもしれないからである。この「ソクラテス的誤謬」の問題は、ギーチの診断では「イデア論よりもずっと大きな影響を与えている」ものであり、探求や教育のあり方を大きく左右する問題提起である。私見では、この問題はイデア認識のさいに感覚的事物(事例)がいかなる役割を果たすのかという、中期イデア論をめぐる問題と交錯する側面をもっている。そこで私は、この問題提起とそれを受けていまでも続く論争に対して、イデア論への展開を視野に入れた観点を導入することにより、ソクラテスの探求方法を有意義にする方向で解決の糸口を探る、という方法を採用した。

4. 研究成果

研究成果として、次の二点を挙げる。上記の研究目的に記した(2)について中心的に論述することとし、(1)についてはそれとあわせて触れることにする。

(1) プラトンの『エウテュブロン』の新しい翻訳と注解の作成。

翻訳の底本には、旧来のバーネット版(Ioanenes Burnet, 1900)との異同にも注意を払いつつ、オックスフォード古典叢書(Oxford Classical Texts)中の新版であるプラトン全集第一巻デューク版(E. A. Duke, W. F. Hicken, 1995)を用いている。この新しい校訂本に基づくこの著作の邦訳は、公刊されるものとしてはおそらく本研究によるものが本邦初であり、今後の研究のための基盤

となるものである。

翻訳と注解の作成にあたっては、いくつかの工夫をした。まず原典に忠実であると同時に現代の読者にも読みやすい訳文をつくるために、多数ある英語訳と日本語訳をつねに参照し、いくつかのドイツ語訳とフランス語訳をも部分的に参照した。また従来の研究に加えて最新の研究動向をも反映させるために、多数のコメンタリー——古典的なアダム(J. Adam, *Platonis Euthyphro*, Cambridge University Press: Cambridge, 1890)やバーネット(J. Burnet, *Plato: Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Clarendon Press: Oxford, 1924)から、最近のベイリー(J. A. Baily, *Plato's Euthyphro & Clitophon*, Focus publishing/R. Pullins Company, 2003)まで——を参照し、その上で研究代表者自身も注解を新しく作成しながら翻訳作業を進めた。さらにまた、『エウテュブロン』とも関連性の深いプラトンの著作『ソクラテスの弁明』や『メノン』について、主要な注解と翻訳を調べ、それらを踏まえた新たな注解と翻訳の作成を部分的におこなった。今後はそれをもとに、『ソクラテスの弁明』についても研究を進め、翻訳・注解を作成し公刊する予定である。

(2) ソクラテスの探求における「定義の優先性」の問題をめぐる論争の整理と新たな解明。

探求における「定義の優先性」の問題とは、たとえば「美とは何であるか」(美の本質あるいは定義)をまず知らなければ「何が美しいものか」(美の事例)も「美は有益なものか」(美の特性)も知ることはできない、といった立場がソクラテスのものであるのか、またそうした立場が哲学的に正しいかどうかという問題である。プラトンの原典にはこの立場を示唆するように思われる箇所が複数見られる。だがソクラテスは「何であるか」を知らないと主張するのだから、この立場は(対話篇でソクラテスがしているように見える)事例を用いた定義探求すら不可能にしかねないことになる。つまりこの問題は、ソクラテスの対話活動(「何であるか」の探求)の有効性、ひいては広く哲学的探求の有効性にもかかわってくるのである。近年では、こうした立場(「ソクラテス的誤謬(Socratic fallacy)」とも称される見解)をソクラテスが実際にとっていたとするギーチの問題提起(Geach, P. T. (1966) 'Plato's Euthyphro: An Analysis and Commentary', *Monist* 50, 369-82)に端を発し、この問題をめぐる大きな論争が研究者の間に生じており、ソクラテスにこの立場を帰する陣営とそうでない陣営に分かれて今もなお論争が続いている。

本研究では、この問題に関する先行研究の調査の結果、従来の研究がいずれの陣営もほぼ共通して、一方でソクラテスの知の否認(知らないという発言や態度)との関連性を意識しつつ、他方で(ギーチが論考中で示唆したとおりに)イデア論と切り離した形で問

題の解明を模索していることがわかった。研究代表者はそのような解明の方針に不備があると予想し、前期対話篇の「何であるか」の問いのうちには(『エウテュロン』に顕著に見られるように)中期イデア論の重要な契機がすでに含まれていることから、イデア論の生成をも視野に入れた形での解明を試みた。その結果、ソクラテスは上述のような立場をとっていても、それは必ずしも哲学的探求を無効ないし不可能にするようなものではないという結論が得られた。知の否認はイデア論的思考とある意味で表裏一体的であり、むしろそれが探求を促す基盤となるのである。

以上の研究成果の公表は、(1)『エウテュロン』の注解・解説付き翻訳については、(別の対話篇と合本する形で)京都大学学術出版会より平成 27 年度中に公刊予定であり、(2)研究論考については、『真宗総合研究所研究紀要』32(大谷大学、平成 26 年度中に発行予定)に掲載の予定である。

上記研究目的の(3)については、研究目的(1)(2)を踏まえた発展的研究であるが、本研究では十分に扱うことができなかつたため、今後の研究でさらに考察を進める予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

1、西尾浩二「ソクラテスの哲学的探求における定義の優先性」(仮題)、『真宗総合研究所紀要』、査読なし、32号、2015年発行予定(印刷中)

[図書](計1件)

1、西尾浩二/朴一功訳『プラトン エウテュロン/ソクラテスの弁明/クリトン』(仮題)、京都大学学術出版会、2015年発行予定(印刷中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

西尾 浩二(NISHIO, Koji)
大谷大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：20510225